

---

 学 会 記 事
 

---

## 第34回新潟画像医学研究会

日 時 平成7年11月11日(土)  
午後4時30分～7時30分  
場 所 ホテルニューオータニ長岡

## 演 題 1

## 1) 小腸原発の malignant gastro-intestinal stromal tumor の1例

将積 浩子・瀬戸 光	(富山医科薬科大学)
柿下 正雄	放射線科
二谷 立介	(同 放射線基礎)
	医学
田近 貞克	(済生会富山病院)
	外科
松能 久雄	(金沢医大二病)

gastro-intestinal stromal tumor (GIST) は消化管の未分化な間葉系腫瘍のひとつで病理学上の新しい疾患概念であるが、画像診断の報告はなされていない。われわれは小腸にできた GIST の1例を経験したので、その画像所見を中心に報告する。症例は62歳男性。腹部腫瘤を主訴に済生会富山病院外科を紹介受診した。CT では小腸の腸間膜側に 13 cm 大の腫瘍があり、内部で air-fluid level を形成しており、壁が厚く不均一に造影された。手術では易出血性の腫瘍が確認され、病理組織で epithelioid cell と spindle cell からなる未分化な組織で actin 染色陰性、CD34 染色陽性であった。

## 2) 経過観察した limy bile の1例とその実験

新妻 伸二・三上 桂子	(新潟県労働衛生)
佐藤 和美・山田 一美	医学協会
鬼山 毅	

8年間にわたり人間ドックで、胃X線検査と超音波検査により経過観察され、胆石が3年目に limy bile となった例を経験した。X線的には陽性結石がみられ、3年目に limy bile になっただけである。ただ胆嚢内に見られた陽性結石が陥頓したのでなく、別の陰性結石が陥頓したと考えられた。超音波では1、2年目は胆石だけの所見であり、4年目からは胆嚢内の石灰のため、胆石は不明となり、全反射と音響陰影だけとなった。3年

目は最初全反射であったが、圧迫により内部の胆石も見えた。塩化カルシウムの懸濁液を作り模型実験をしたが、20%では胆石がよく観察され、40%では全反射、30%で全反射と結石の観察が見られ、3年目の所見と一致した。

## 演 題 2

## 1) 乳癌検診の問題点

佐藤 敏輝 (長岡中央病院)  
放射線科

乳癌検診の目的は乳癌の死亡率を減少させることである。現在の乳癌検診は視・触診法で行われている。しかし、これが乳癌の死亡率を減少させるという証明はない。検診を継続するためには、randomized clinical trial を実施し、死亡率の減少を証明する必要がある。上記の根幹的問題は別にして、現在の乳癌検診の大きな問題は検診発見癌が少ないことである(当院乳癌全体の6%)。この原因は受診率が低率であることである(長岡市の乳癌検診受診率は8%前後を推移)。また検診発見乳癌と外来受診発見乳癌の予後に関しては差がないか小さいという報告が多い。そこでより小さな癌の発見をめざして検診にマンモグラフィの導入が考えられている。しかし小さな癌の何%が致死的な進行癌になるかという問題は解決されていない。死亡率の減少で検証することが不可欠である。またより小さな癌の発見をめざした場合、偽陽性率の上昇もかなり問題となることが予想される。

## 2) 肺癌検診の精度管理上の問題点

小田 純一 (西新潟中央病院)  
放射線科

1983年から1992年までの10年間の新潟市肺癌検診の検診成績を前半5年と後半5年の2期に分けて比較し、この10年間で検診精度が向上してきているかどうかを検討した。

肺癌発見率や精検受診率などの比較では前半と後半で違いはみられなかったが、発見肺癌の生存率の比較では、前半5年の発見肺癌93例の5年生存率が33%だったのに対し、後半66例の生存率は64%と有意に向上しており、手術症例106例についてみると前半の43%が後半では86%と著明な生存率の向上が認められ、生存率の面からは検診精度が向上していることが確認できた。しかし、検診受診率の比較では受診率の著明な低下がみられ、新潟